

平成26年度採択 領域開拓プログラム(課題設定型研究テーマ)

◆課題:「行動・認知・神経科学の方法を用いた、人文学・社会科学の新たな展開」

◆研究テーマ:「『社会価値』に関する規範的・倫理的判断のメカニズムと  
その認知・神経科学基盤の解明」

研究期間: H26.10~H29.9

## <研究代表者>

亀田達也: 東京大学大学院人文社会系研究科/教授

<専門分野> 実験社会科学、社会心理学

<Webページ>

<http://www.tatsuyakameda.com>

## <研究目的、概要>

富や権利の配分を含む「社会のあり方」に関する価値対立は喫緊の政治的・社会的課題



・「社会価値」に関する**規範的判断のメカニズム**を計算論モデリング、脳画像計測、視線計測、自律神経・内分泌反応計測など、行動・認知・神経科学の先端手法を用いて検討  
・**法哲学・倫理学の規範理論と実証の有機的接合**



- (a) 異分野融合による**国際的最先端研究の展開**
- (b) **規範と実証をつなぐ対話コミュニティ**の形成
- (c) 公共政策や司法判断に係る実践的議論のための**基礎理論の整備**

## <異分野間での研究プロジェクト運営>

- ・文理の壁を超えた世界的インパクトをもつ成果の発出に向け、**研究アジェンダを焦点化**
- ・法哲学/倫理学の研究者、心理学、行動・実験経済学の研究者、脳科学・数理情報科学の研究者からなる**先端的チーム**を組織

## <研究成果、波及効果等>

- ・社会価値に関する人文学・社会科学の規範的理論(〜べき)と、人間の認知・行動に関する、行動・認知・神経科学の先端手法に基づく記述的理論(〜である)の接合
- ・現代正義論の端緒となった**John Rawls**の“無知のヴェール”や“Maximin原理”などの規範理論的概念が、人々の実際の分配判断でも重要な役割を果たすことを、行動・認知・脳科学実験により解明  
→ **米国科学アカデミー紀要(PNAS)**にコメント付き論文として公開。文理融合の先端モデルとして高い評価



Rawlsian maximin rule operates as a common cognitive anchor in distributive justice and risky decisions

Tatsuya Kameda<sup>a,1</sup>, Keigo Inuka<sup>b,2</sup>, Satomi Higuchi<sup>c,3</sup>, Akitoshi Ogawa<sup>d,4</sup>, Hackjin Kim<sup>e</sup>, Tetsuya Matsuda<sup>f</sup>, and Masamichi Sakagami<sup>g</sup>

<sup>a</sup>Department of Social Psychology, The University of Tokyo, Tokyo 113-0033, Japan; <sup>b</sup>Institute of Social and Economic Research, Osaka University, Osaka 567-0847, Japan; <sup>c</sup>Institute for Biomedical Sciences, Iwate Medical University, Iwate 020-3494, Japan; <sup>d</sup>School of Medicine, Aomori University, Tokyo 113-8421, Japan; <sup>e</sup>Department of Psychology, Korea University, Seoul 136-701, Korea; and <sup>f</sup>Brain Research Institute, Tohoku University, Tokyo 194-8616, Japan



- ・人文学・社会科学を通底する新たな方法論として**実験社会科学**の提唱 → 一般書の刊行による大きな反響

